

## 国際関係論 専攻 博士前期 専門科目

1. 「国際関係はパワーによって規定される。」①この命題の妥当性を示す事例を説明したうえで、②想定される反論を検討し、③それに対する再反論を行ってください。

・出題意図：リアリズムの国際政治理論と、リベラリズム、コンストラクティビズム、政策決定過程論等の関係性に対する理解、およびそれらを具体的な事例に基づいて検討する能力を問うことを意図した。

## 2.回答例（ポイント）

・地雷の使用を禁止する国際的キャンペーン

・NGOや国家、国際機関を交えたネットワークが国際条約の締結のために働きかけを行い、多数の国家が調印した

・ただ参加国は軍事力の強い国が参加を見送ったり、実際に紛争に関わっている国は参加しなかった

・さらにウクライナ戦争の勃発で地雷の使用が大幅に差異化され、フィンランドのように既に参加していた国が条約への参加を停止させる動きなどが限界を示す

## 3.

現代社会の貧困問題を構造的に捉えることができるか、またそのような構造がどのような歴史的経緯で形成されたのか結び付けて考察することができるかを問う問題である。例えばヨーロッパの植民地支配とアフリカの貧困。植民地支配を通して、現在のアフリカの諸々の制度がどのように形成され、そしてそれらの制度がどのようにアフリカの貧困の構造的な要素となっているのか。幾つか事例を挙げながら論じることが求められる。

## 4.

CSCE（欧州安全保障協力会議）は、1975年のヘルシンキ最終議定書に明示されているように国家主権の平等、領土保全などの10原則をもとに始まった東西両陣営間の対話と交渉のためのフォーラムであった。既存の国々の主権や第二次世界大戦後の国境線が尊重されることで、社会主義諸国（特に東ドイツ）の体制が加盟国間で確認された点で社会主義陣営にメリットのある枠組みであったが、同時に、加盟国内の人権問題も広義の安全保障課題としてフォーラムで扱うこととなったことは、社会主義諸国内の市民的自由や基本的人権のあり方に影響を及ぼすこととなり、同陣営の盟主であるソ連・ゴルバチョフ政権による政治改革と連動して発生した1980年代末の東欧諸国の政治変動（いわゆる東欧革命）の遠因となった。

冷戦終焉後、CSCEは国際機関としての機能を高め、OSCE（欧州安全保障協力機構）となり、人権分野に係る加盟国の民主化支援（選挙監視活動など）を継続した。1990年代から2000年代前半にかけては、同機構の活動は加盟国どうしの信頼醸成を前提に地域としての安全保障を高めていく協調的安全保障の成功例として考えられた。しかし、主要加盟国であるロシアがこのような機構の活動に次第に反発するようになり、同国が関与した地域紛争や政変（2008年のジョージアへの軍事侵攻、2014年のウクライナからの強制的なクリミア併合など）と連動し、加盟国間のコンセンサスで意思決定がなされる機構は次第に機能不全に陥った。2014年のウクライナ危機以降もOSCEは同国内の紛争終結に向けた交渉に関与してきたが、2022年2月のロシアによる本格的軍事侵攻により、その活動は破綻した。

このように、OSCEは加盟国間の信頼醸成が高まっていた時代には地域の安全に一定の寄与を果たした

といえる。また、EU（欧州連合）や北米からの欧州にわたる軍事機構であるNATO（北大西洋条約機構）の活動やそれらの領域的拡大がOSCEの推進する協調的安全保障に寄与する側面もあった。しかし、とりわけNATO拡大に反発するロシアの強制的な対外政策が顕著となる中で、ロシアと米欧諸国間の亀裂を抑えるための制度的・機能的な役割をOSCEは果たせなくなっていった。機構自体の改革に踏み切れなかったこと、少なくともその改革が漸進的なものにとどまったことがOSCEの平和活動の破綻の要因であったと考えられる。